

# Computer Report

Vol. 57 No. 1 1月号 (通巻 748号)

## 謹賀新年

■年末に安倍首相の外交日程は忙しかった。12月15日に来日したロシアのプーチン大統領とトップ会談。そして年の瀬の迫った28日には真珠湾を訪問、アメリカのオバマ大統領と戦没者慰霊をした。いずれも、新年に就任予定のトランプ次期大統領を意識した外交戦略だと言えるだろう。どれだけの外交成果が出てくるかは、今後の政治展開、情勢変化を見るしかない。いずれにせよ、目に見えるまでには時間が必要だろう。

■イギリス、アメリカというアングロサクソン人種を中心にした国々と言えば、世界の先駆的覇者として世界に向けて常に開国を求めてきた国々である。まさにグローバリゼーションの先駆をなしてきた。それが、あらゆる分野での国際的ルールの確立形成の基をなしてきた。幕末において坂本龍馬が注目したとされる万国航法然りである。従前の各国を鎖国政策から開国政策に導く基礎となってきた考え方である。

■それは各国に割拠していた小国を連結統合させる原動力ともなった。日本における幕藩体制から廃藩置県への移行、明治維新政府の確立に見られる動きも、そのひとつの例である。その対応に遅れた国々が、列強国の支配下におかれ植民地とされた。また、不当かつ不平等な条約を押しつけられたりされてきた。歴史が示す通りである。不平等条約下で苦しめられたのは、日本とて例外ではない。いまだにその系譜は残されたままである。

■グローバリゼーションの要諦は、全世界的観点に立った最適化を目指すことにある(と理解したい)。そう理解すべきだとされてきたはずである。その提唱者であるアングロサクソン英米が、一転、自国最優先の意思を表明した。EUからの離脱を国民投票で示したイギリス。自国民ファーストを前面に押し出し、あまつさえ人種的偏見のタブーをも口にする候補を次期大統領に選んだアメリカ。ひとつの閉塞感を象徴した動きだと言えよう。

■しかし今さらに自国民最優先=自国民ファーストを言う英米人の感じている閉塞感には、一種とてつもなく理解し難いものを感じざるを得ない。曰く「自国民が職業の機会を奪われている」。この場合の自国民とは、限りなくアングロサクソン人種を指していることは明々白々。正確に言うと、限りない不愉快さ、不快感を覚える。散々他国民、他人種の職業の機会を奪ってきた自分たちの過去の歴史をどう総括しているのだろう。

■こうした英米の身勝手さを黙って見ていないのが、ロシア、中国である。したたかに英米欧が対峙しているシリア政府に加担し反対勢力に空爆を展開するロシア、チベット/ウイグル族など中央アジアでの侵略支配だけに飽きたらず南沙諸島に侵略侵攻している中国の動きは、まさに英米欧などが難民問題で内向きになっている姿勢を読み切っている証拠である。すかさず、ロシアは北方領土問題をちらつかせ、日本に擦り寄ってきている。

■情報処理テクノロジーが、こうした世界戦略の幅広い分野の根底で展開されていることは言うまでもない。米国大統領選の最中、ロシアによる米民主党の主力サーバーにハッキング作戦が展開されたとされるなど、裏舞台における情報処理も巧みに実行されている。戦争も経済活動の一部だと言われる。情報処理システム展開が、大いなる経済活動でもあり、戦闘活動でもあることは言うまでもない。どんな新年となるか。(藤見)